様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２５２７
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５３３０７

研究課題名（和文）小学校音楽科における児童の音楽的思考を深める「言語活動の充実」の分析と具体化

研究課題名（英文）Analyzing and Giving Shape to "Enhancement of Language Activities" that Deepen the Musical Thought of Children in Elementary School Music Classes

研究代表者
高木　夏奈子（TAKAGI, Kanako）

植草学園大学・発達教育学部・准教授

研究者番号：５０５３１６２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円、（間接経費）　　510,000円

研究成果の概要（和文）：「音楽的思考」の言語分析を行った。この語は文脈によって様々に用いられており、使用においては留意が必要であることを確認した。次に、実際に児童はどのように「音楽を語る」のかを、児童による音楽鑑賞文を対象に分析した。児童の記述は演奏者や楽曲の特徴、授業者の発問・指示によって大きく変化する。児童の音楽的思考を深める言語活動であるためには、音楽活動の所産としての言語表現に指導の重点を置くのではなく、音楽活動中に思考を音と音楽に密着させ、思考を焦点化させるための言語化を目指すべきであるという結論を得た。

研究成果の概要（英文）：First,I carried out a language analysis of "musical thinking." I confirmed that this term is used differently depending on the context, and care is required in its usage. Next,I analyzed the ways that children actually "describe music" using children's written impressions of listening to music. Children's accounts vary widely depending on the questions and instructions of those teaching the course,as well as the traits of the performers and the musical works. I concluded that in order to achieve language activities that deepen the musical thinking of children,the priority in instruction should not be on linguistic expression as the product of musical activities;instead,we should encourage children to center their thoughts on sounds and music during musical activities, and then strive for verbal expression for the purpose of focusing those thoughts.

研究分野：音楽教育　教育哲学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：小学校音楽科　言語活動の充実　音楽的思考

１．研究開始当初の背景

言語に関する能力の育成は、今次（平成 20 年告示）学習指導要領改訂の柱の一つである。

平成 20 年の中央教育審議会の答申では、「思考力・判断力・表現力等の育成」があげられ、それらの基盤となる言語に関する能力の育成のため、国語科における取組みに加え、「各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要がある」と指摘された。

それを受けて音楽科においては、小・中・高を通じて鑑賞活動は「根拠をもって自分なりに批評することのできるような力の育成を図る」とされ、小学校音楽科の改訂の要点として「言語活動の充実」があげられ、「鑑賞領域の各学年の内容に、感じ取ったことを言葉で表すなどの活動」が位置付けられた。

言語はもちろんのこと音楽もある種の記号体系であり、両者の関係は、記号論（学）を含め哲学において関心の高い問題である。

しかし、音楽教育界においては、音楽は言葉では語れない、という考え方が一般的であり、学習指導要領の改訂によってトップダウンで「言語活動の充実」を求められた現場の困惑は深かった。

音楽を批評するとはどのような事態なのか。音楽を理解し深く味わう過程で言語はどのような働きをしているのか。言語を通して理解することによって学習者の音楽的思考はどのような影響を受けるのか。これらは音楽科において言語活動を充実するうえで避けて通ることのできない重大かつ根本的な問題であるが、音楽教育界においては殆ど論じられてこなかった。

本研究に着手した平成 23 年度は、小学校で改訂指導要領が完全実施される年度であった。試行期における実践例の蓄積も進んでいたが、現場の意識は主に言語活動の量的充足に向けられており、学習者の音楽的思考への影響が十分検討されていないと思われる例も散見されていた。音楽科として望ましい「言語活動の充実」の在り方を探ることは、音楽教育界にとっても、音楽的思考と言語の関わりの分析を研究課題の中核とする筆者にとっても喫緊の課題であった。

２．研究の目的

本研究においては、小学校音楽科における「言語活動の充実」を音楽的思考の深まりという観点から分析し、音楽科として望ましい、音楽の理解に資する言語活動を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

先行研究の吟味をふまえ、授業者及び学習者によって発せられ記述された言葉を、学習者の音楽的思考の深まりという観点から記号論的・分析哲学的手法によって分析する。その分析をもとに、音楽的思考を深める言語活動とはどのようなものなのかを考察する。

４．研究成果

本研究で得られた知見は次のとおりである。

(1)「音楽的思考」という語の使用状況について――「音楽的思考」の言語分析

本研究の基本的概念の一つである「音楽的思考」の語が、音楽教育研究においてどのように使用されているのか、言語分析を試みた。その結果は次のとおりである。

① 「音楽的思考」の語は、1960 年代アメリカで行われた教育課程改革運動の一つである Manhattanville Music Curriculum Program（以下、MMCP と略記）で用いられた musical thinking の訳語として小島律子によって紹介された（小島、1980）。小島は、「MMCP は音楽的思考ということばについて特に定義していないが、音・音楽に即して考えを進めるという包括的な意味あいで音楽的思考ということばを使っている」としているが、MMCP では「音楽的思考」を「音楽づくり」に能動的にかかわっている思考をとして想定しており、かなり限定された文脈での使用となっている。

② 日本学校音楽教育実践学会では、1998 年から 2001 年までの 4 年にわたって、「音楽的思考」をキーワードとする 4 回のラウンドテーブルを行っている。1999 年のラウンドテーブルでは、小島により「音や音楽に働きかけるとき、頭の中で連続的に進行している意識の流れ（イメージの形成、音の選択等）」という定義が示された。しかし、その後のラウンドテーブルでも、「思考を論じるための用語の概念規定や、用語と用語の関係に関する質問が多かった」ことが報告されており、「音楽的思考」の語の用い方について、音楽教育界において共通理解が成立しているとは言い難い状況であった。

③ 阪井恵は「音楽的思考」は、「切り口を限定し、また実践の中で生起する現象の具体例によって考えていかないと、論ずべき問題が明確にならない」ような「広い概念」であることを指摘し、「まさに音楽に固有であるような思考」として、その具体例として「音楽の基本的な語法を操作する思考」を挙げている（阪井、2000）。

語というものは、専門的用語として規定されても、多くの人に使用されると日常言語の意味に浸食され、変質していくものである。本研究において「音楽的思考」の語は、「音・音楽に即して考えを進める」「まさに音楽に固有であるような思考」という広い意味で用いることとした。

(2)「音楽的思考」と言語との関わりについて

音楽は音を媒体とし独自のゆるやかなコ

ードによって何らかの解釈内容を生じさせるある種の記号体系であり、音楽を経験し理解し味わうのは、ある種の思考過程である。その思考過程において言語はどのように機能するのか。

音楽教育界においては、今まで音楽教育活動における言語の働きについての議論が十分に行われてこなかった。その中で、小島（2012）の次の主張は注目されるべきである。

「子どもが音楽活動の主体となり、自分で音楽表現をつくりあげていく授業を行うには、言語活動が必須となる。なぜなら音楽表現をつくりあげていく過程は音楽的な思考の過程であり、思考は言語をもつことで可能になるからである。」「音楽経験をより発展させるためには音楽経験を省察することが必須となる。そのための言語なのである。」

筆者は、言語を経由しない音楽的思考もありうると考えるが、「音楽経験を省察する」ためには言語が必須であるとする小島の主張に賛成する。言語化によって失われるものもある。しかし、何らかの対象を同定し、それについて考えるためには言語は不可欠であり、音楽的思考も例外ではない。特に授業という特殊な音楽経験の場面においては、言語化によって思考を音・音楽の何らかの部分に焦点化させることが極めて有意義であると考える。

（3）音楽鑑賞文にみる児童の「音楽の語りかた」の分析

音楽の授業における言語活動において、そもそも児童はどのように音楽を語るのかを、児童の記述した「音楽鑑賞文」を対象に分析した。その結果は以下の通りである。

① 「すごい」「きれい」等、抽象度が高く様々な具体例に適用可能な語が多用されている。
② 詳しく記述したい場合には、より意味の狭い形容詞等が用いられるが、適切な語彙を持たない場合には、そのような感覚・感情を体験するであろう状況・情景を記述したり、比喩を用いたりする。
③ しかし、児童の記述の重点は、演奏者や楽曲の特徴、記述を求める際の指示文等に大きく左右される。授業者は、その音楽経験のどのような点に児童の思考を焦点化させたいのかを明確にし、言語活動を組織することが重要である。

（4）音楽の授業における言語化の意義

「音楽を語る」ことは、音楽という記号体系を、言語という異なった記号体系を使って切り分け整理する営みである。これは、大人でも易しいことではない。児童の言語能力は発達途中であり、意を尽くした記述を求めるのはさらに困難である。そのため、（3）で分析したように、抽象度が高く様々な具体例に適用可能な語が多用されることになる。

従来、音楽科の教員の多くは、学習者に音楽を語らせることについて慎重であった。言語化によって思考が音・音楽から離れ、言語操作にその重心を移してしまう危険性があり、児童の書いた文と音楽経験の質が必ずしも一致するものではないことを深く理解しているからである。

しかし、特に音楽学習の場面において、言語化は一定の役割を担いうる。その役割を筆者は次の 3 点に整理する。

① 学習者の思考を焦点化させうる。
② 思考を言語化し、定着させることによって、それについて考えること、つまりメタ思考が可能になる。
③ 他者の感じ考えたことを不完全ながら知ることができる。他者の解釈を知ることにより、様々な解釈が可能であることを知り、自身の解釈の可能性が広がる。また、それを通して他者理解および自己理解に資することが可能である。

（5）音楽的思考を深める言語活動について

以上の考察をふまえ、森保尚美教諭（広島大学附属小学校）の研究授業における言語活動を分析した。

授業では、2 年生の児童が教材曲の表現の工夫を言語化しながら音楽表現とともに友達に発表していた。児童たちがシートに記入した表現の工夫では、「（ここは）高く（歌う）」「（ここは）低く（歌う）」という記述が多くみられた。

児童の「高く（歌う）」という言語表現は、「音高を高く歌う」という一般的な用法とは異なっていたが、授業者の「高い響きで歌う」という補助的説明にも助けられ、その授業において文脈と音響を共有している状況では、その音響の何に注目すべきかを示す記号として有効に機能していた。この事例での言語活動は、表現の工夫の言語化によって児童の思考を焦点化させ、音楽表現の違いを言葉で定着させ吟味することを可能にし、音楽表現をクラスで共有するために有効な活動であったと考える。

一般に音楽科の言語活動としては、指導要領において鑑賞領域が想定されていることもあり、学習のまとめとして、いわゆる「感想文」に類するものを書くことが多い。もちろん、このような「学習の所産としての言語活動」も重要である。学習者が自己の思考を整理し、また、学習者がどのように自己の音楽経験を捉えているかを授業者が推測することが可能になるからである。

しかし、音楽的思考を深めるための言語活動としては、音楽活動中の「学習者の思考を焦点化させるための言語活動」こそを重視すべきである。「音・音楽に即して考えを進める」「まさに音楽に固有であるような思考」であるためには、言語表現としての形は整わなくとも、思考が音と音楽に密着した状態にあることが必要だからである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 高木夏奈子（2014）「『音楽鑑賞文』にみる児童の『音楽の語りかた』の分析」『植草学園大学研究紀要』第 6 巻、pp.15-25（査読有）

〔学会発表〕（計 3 件）

① 高木夏奈子「音楽科における児童の『言語活動』を促す授業者の〈言葉〉―美術鑑賞教育における『対話型ギャラリー・トーク』からの示唆―」、日本音楽教育学会第 44 回大会、2013 年 10 月 12 日、弘前大学

② 高木夏奈子「『音楽鑑賞カード』記述文にみる児童の「音楽の語り方」の分析―〈音楽〉〈ことば〉〈思考〉についての哲学的一考察―」、日本音楽教育学会第 43 回大会、2012 年 10 月 7 日、東京音楽大学

③ 高木夏奈子「『音楽的思考』の言語分析の試み―「言語活動の充実」との関わりに重点をおいて―」、日本音楽教育学会第 42 回大会、2011 年 10 月 23 日、奈良教育大学

６．研究組織

(1)研究代表者

高木　夏奈子（TAKAGI Kanako）
植草学園大学・発達教育学部・准教授
研究者番号：50531620